

1 学期終業式校長式辞要旨

君たちは、やっと1学期が終わるという感覚かも知れないが、私にとっては、早くも1学期が終わってしまうのかという印象である。

いつも言うが、時間というものは人間にとって最も大切なものだと思う。6月22日に34才で亡くなった小林麻央さんのことを思うと、私は何をしてきたのだろうと反省ばかりだ。そうこうしていたら、昨日には医師の日野原重明さんが105歳で亡くなった。こうして二人を並べてみると、最愛の二人のこどもを残して34歳でこの世を去らなければならない人もいれば、105歳まで現役医師として社会に大きく貢献する人もいる。こんな理不尽さが人生だと認めるしかないのだが、本当に不公平だと考え込んでしまう。

今日はまず、10日と昨日、3年生におこなった面接指導で感じたことを話す。

おそらく、特別な職種でなかったら、君たちは希望すれば実家から通える職場に就職できるだろう。そのことは果たして当たり前のことなのか考えてもらいたい。

このことは決して当たり前ではない。

大きな企業が水島に立地していることもあって、働き場所がいっぱいあるだけなのだ。君たちが生まれ育った場所が働き場所のあまり無いところだったら、おそらく就職と同時に実家を出て一人暮らしを始めなければならないだろう。

この備中地域にたくさんの働き場所があることは、君たちの親の世代、祖父母の世代などの方々がこの地域でしっかりと仕事をしてくられた故の幸運なのだ。自分たちの努力でも何でもないことに気付いて欲しい。

こんな恩恵を受けているのだから、君たちの将来の子どもや孫にも君たち同様の恩恵を与えてやって欲しい。君たちの世代が、先輩の作り上げられた財産を食いつぶして、この地域を衰退させてしまったら、君たちの子どもも孫もこの地区を去らねば生きていけなくなってしまうのだ。この備中地域でそんなことはないだろうと高をくくっているだろうが、日本が栄え続ける事など誰も保障してはくれない。

平家物語の冒頭は試験対策で覚えさせられたが

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。」とある。

盛んであると言うことは、衰退の入口なのだ。上り詰めたら下るしかないのだ。

徒然草の83段には

「月満ちては欠け、物盛りにては衰ふ。万の事、さきのつまりたるは、破れに近き道なり。」とある。

歴史はこの道理を示しているのだが、そのとおりにならないためには、努力と工夫しかない。何をせずとも日本の繁栄が、君たちの孫子の代まで続くなどと考えているのは甘すぎる。一人一人の力はたいしたことはないが、力を合わせれば力が出る。自分たちが受けるであろう恩恵を君たちの子どもや孫が受けられるように、この地域に貢献出来る人材たれ。君たちの奮起を期待する。

それでは夢手帳の2ページを開きなさい。

ここには、手書きで今年の本校の育てたい人材と九つの身につけるべき素養が書いてあるはずだ。

3年生は面接ですらすら言えるように暗記して欲しいくらいだ。この九つの素養をすらすらよどみなく言えて、そういう人間になりたいと言ったら、さぞ感心されるだろう。

さて、もう一つ面接練習で気になったことは、商業高校で学んで身につけたことが何なのかが言えないということだ。礼儀やマナーや挨拶が身についたとか、部活動や検定に向けた努力をとおして、諦めずに努力することが出来るようになったと一番に言う人があるが、それは商業高校でなくても身につくことだ。商業高校が一番だというのは、工業高校、農業高校、普通科高校に失礼だ。私は普通科高校出身だが、そういった礼儀やマナーが身につけていないですか。そうではないでしょう。

そういったどこの学校でも身につくことではなくて、他校種では身につかないことで、商業高校でこそ身につくことは何なのかを言って欲しいのだ。

私は、一言で簡単に言えば、近江商人の「三方良し」の精神が身についたということではないのかと考えている。

儲からなければ商売は持続しないのだから、適正な儲けを出すための方法を学んだのではないのか。その儲けを持続するためには顧客を満足させる必要があるのだろう。その二つが「売り手良し」「買い手良し」だ。簿記や情報処理のスキルや知識は、適正な儲けを生み出して持続させるために必要な手段であって目的じゃないだろう。検定取得は目的ではなく目標なのだ。

そして「売り手良し」「買い手良し」に加えて「世間良し」であってこそ、社会は良くなっていくんじゃないのか。今やそのグローバルでダイナミックな経済活動の仕組みを学んだことこそ、他校種にはない商業高校のアドバンテージだろう。

たとえば、ヘルメットを被って作業する仕事に就いた際、確かに工業高校生に比べれば技能は劣るだろうが、作業効率の向上、不良品の発生抑制、労働災害防止、人件費抑制等々、原価をいかに下げることが会社の利益に繋がるということを理解して作業できるんじゃないのか。最初は組織の末端にいても、会社や組織を繁栄させる方法を知っていること、それが君たちのアドバンテージだ。

話しは変わるが、今は車のメーカーとして世界に冠たるホンダだが、もともとはオートバイメーカーだった。本田宗一郎という天才技術者が素晴らしいスーパーカブという

バイクを作ったが、彼は職人であり、技術者でしかなく、商売はできなかったのだ。その素晴らしい大発明とも言えるスーパーカブが世界中で飛ぶように売れたのは、藤沢武夫という商売の出来る副社長がいたからだ。

社長の本田宗一郎は、商売はすべて藤沢武夫に任せて大金のかかる開発ばかりやっておれたのは、商業を学んだ藤沢がいたからなんだ。素晴らしい商品を生かすも殺すも商売次第なのだ。もし、本田宗一郎だけだったら、彼の天才的なひらめきが世に認められることもなく、浜松の修理工場のオヤジさんで終わっていただろう。

経済は世界を動かしている。その素晴らしい学問を商業高校で学んでいることに誇りをもってもらいたい。

ここから全く話しが変わる。

2・3年生はもう忘れていだろうが、昨年今日、このステージの上で、なぜ私がギプスを巻いてるかを説明した。昨年7月9日に左アキレス腱を断裂し、13日に手術をして、6日目が終業式だった。あれから1年が過ぎた。

昨日のニュースを見ていたら、昨年7月20日に私と同じ左アキレス腱を切った阪神タイガースの西岡選手が一軍でヒットを打っていることを知った。彼は一旦は引退しようと思ったが、手術して入院している時に、同じ病院に病気で苦しんでいる子供達がいることを知って交流したことで、もう一度やってやるという気持ちになったらしい。人は自分に何か不幸なことが起こると、「どうして自分だけが」と考えてしまうものだが、彼はそうではないことを病気の子供達に気付かされたのだ。自分だけが不幸だなどと甘ったれた考えを持つことは、もっともっと不幸な人たちに失礼だ。西岡選手の復活を期待したい。

あと二人、気になるアキレス腱断裂者がいる。今は大相撲名古屋場所の最中だが、関脇まで務めた二人の力士が幕内に復活しようとしてあがいている。一人は現在十両の安美錦、もう一人は幕下の豊ノ島だ。それぞれ、昨年の5月と7月に断裂し、休場を余儀なくされ、十両と幕下まで陥落しながらも、不屈の精神で毎日土俵に上がっている。私は西岡選手と同じように応援している。野球や相撲に全く興味がない人もいだろうが、タイガースの西岡選手、大相撲の安美錦と豊ノ島に注目してほしい。

同じアキレス腱断裂仲間として、この三人に負けないように、私ももう一度剣道の世界で復活してやるという気持ちだ。

人生には色々な試練が訪れる。その時に、「何で自分だけが」と思ったら終わりだ。自分を鍛えるチャンスを与えられたと思えたら大丈夫だ。

いよいよ夏休みだ。いつも言うが、家族や親戚との時間を大切に、そして道路上では命がけであることを肝に銘じ、有意義な日々になることを期待し、式辞とする。